

## 世界のくらしと文化

— モンゴル国 ①

### 見えない差異

— モンゴルの言語と  
モンゴル人の名前から



バイクに乗った少女

風戸 真理

はじめに

私は一九九七年四月から一九九九年三月まで、平和中島財団の奨学生としてモンゴル国に留学した。この期間の大部分を首都ウランバートルから遠く離れた草原の牧畜地域で過ごした。遊牧民家族のゲル（移動式天幕）に同居させてもらい、牧畜の技術と牧畜民の社会のあり方に関する生態人類学的な調査をおこなった。

私が高校を卒業する時、同級生が東京外国語大学のモンゴル語学科に進学すると聞いた。その時、「この現代世界にモンゴル語を話す人がいるのだろうか」と思った。私にとってモンゴルは元の時代に栄えた歴史上の民族であって、同時代を生きる人びとであるとは想像もしていなかった。まことに恥ずかしい限りであるが、このような私が現在、モンゴルの研究をしている(1)。そして痛感するのは、いまでも多くの日本人と多くのモンゴル人がお互いについてほとんど知らないということである。

#### 一 モンゴル人による日本イメージ

モンゴル研究を始めて後、モンゴル遊牧民から「一、二、三……を中国語で何というのか」、あるいは「中国語を話すか」と幾度となく問われた。これはつまり、日本人であるあなたの母語は中国語か、という問いである。また、顔を見据えられて「おまえ……ドイツ人だっけ？」と聞かれたこともある。「日本語って英語ですか」というのもあった。アジアと欧米の区別を自明視しない認識枠組みとの出会いは私にとって衝撃だった。

日本に戻ると今度は、「モンゴルでは中国語で話すのか」、あるいは少し遠慮気味に「モンゴル語は中国語と似ていませんか」と多くの人びとからたずねられた。近年、日本ではモンゴルに関するテレビ放送などの情報が増えた。また、人の移動が頻繁になり、とくにモンゴル人力士が角界で活躍している。

日本の国技とされる相撲は、モンゴルではどのように受け入れられているだろうか。モンゴル国では「場所」が始まると、老若男女が一日中テレビに釘付けになり、

日本人を次々と打ち負かすモンゴル人力士の姿を見ている。放送は一日三回、十両から横綱まですべてが繰り返し放映される。モンゴルでは「関脇」や「場所」など相撲用語が日本語のまま使われている。だが、モンゴル人力士の名前はモンゴル名でよばれることが多い。たとえば「ダグワドルジ（朝青龍のこと）がコトミツキに勝った」となる。

相撲を代表とする交流のおかげで、今やモンゴル人も日本人も互いに、「モンゴル」や「日本」という集団の存在を受け入れている。しかしその中身に関しては、両者共に相手を、中国文化の一部のようなものとして漠然とイメージしているようである。このエッセイをモンゴル国出身の知識人にチェックしてもらった。すると、「日本は漢字を使うから中国と似ているが、モンゴルのどこに中国との共通点があるのか」と上の一文を書き直すよう意見された。モンゴル人は概して、中国が嫌いである。

## 二 モンゴル人のよりどころ、モンゴル語

モンゴル人は日本の四倍の面積をもつ独立国家「モンゴル国」をもつ。これが朝青龍らの故郷、俗にいう「外モンゴル」である。モンゴル国の人口は約二五〇万と少ないが、その主要民族はモンゴル人、正確にいえばハルハ・モンゴル人である。そして大統領も国会議員もモンゴル人である。公用語はモンゴル語である。日本ですべてのことが日本語でなされているように、モンゴル国では国会討議、保育園から高等教育、テレビ・ラジオ・新聞報道、学術的・大衆的な出版物のほとんどがモンゴル語で書かれ、話されている。

モンゴル人はモンゴル国のほか、東北アジアの広い範囲に分散して暮らしている。すなわち、中国には内蒙古自治区（いわゆる「内モンゴル」）をはじめ、新疆や青海省などにモンゴル民族の自治行政体が複数ある。またロシア連邦には、ブリヤート共和国やカルムイク共和国をはじめとした一定の自治権をもつ行政領域がある。だが、中国やロシアにおいてモンゴル人は少数民族である。

は、このモンゴル文字による教育と出版がおこなわれている。ところが、モンゴル国とロシア連邦内のモンゴル人は、ロシア語と同じ文字であるキリル文字で自分たちの言葉を書き表す。キリル文字は、旧ソ連の政策により識字率向上を第一の目的として導入された。キリル文字はモンゴル文字よりも文字が少なく、また口語に近い正書法が定められたため習得が容易であったとされる。また、ロシア人でも文字が解読できた。なお敗戦後の日本においても、GHQにより日本語をローマ字書きするよう強く勧められたことがあった。日本の知識人は大議論の末これを退けた。そのような経緯があって、いま私は漢字とかなを使ってこの原稿を書いている。

## 三 「誰の子か」

さて、私が調査をおこなったのは、モンゴル国の中央部に位置するアルハンガイ県チョロト郡バイヤンハイルハン行政区（以下、ハイルハンとする）である（地図一）。

ハイルハンで私にはじめて出会った人が発する第一声はいつも、「誰の子か」だった。父の名をたずねる決ま

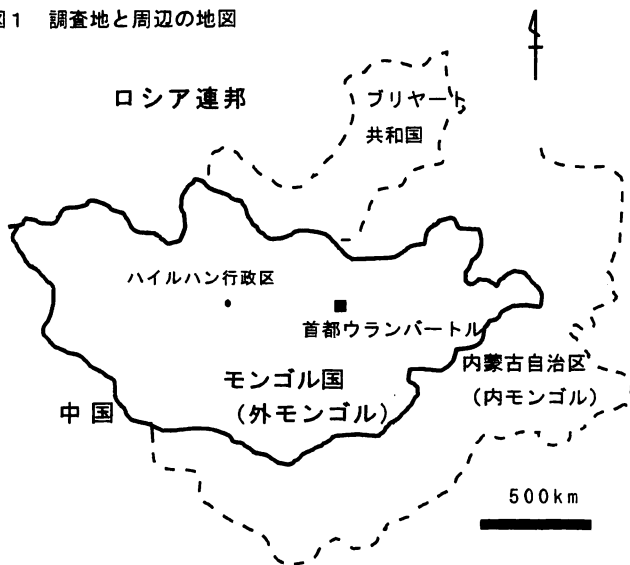
る。モンゴル人が首座民族の位置を占めるのは世界中にモンゴル国ただ一つである。

モンゴル系諸民族の生活と文化には、多様な地域バリエーションがあるが、共通しているのはモンゴル系の言語を話す点である。モンゴル語は膠着語（こうちゃくご）であり、基本的に日本語と語順が同じである。中国語やロシア語とは文法的にも系統的にも似ていない。

文法については、たとえば「私は大学へ行く」をモンゴル語では「ビー（私は）・イヒ（大）・ソルゴリー（学校）ト（に）・ヤウン（行く）」という。ところが中国語では「我去大学」と、動詞を先に出す英語のような語順となる。「学校に行かないのですか」といった否定形を用いた婉曲表現も共通している。「ソルゴリー（学校）ト（に）・ヤワフグイ（行かない）・ユム（の）・オー（か）」と言うと、相手にやんわりとプレッシャーをかけることができる。

モンゴル語を表記する文字については、一三世紀以来の歴史をもつ「モンゴル文字」がある。これはウイグル文字をもとに作られた縦書きの文字で、日本語とは反対に左から右へと書いていく。中国内のモンゴル人地域で

図1 調査地と周辺の地図



り文句である。四〇代以上の人びとは、私が彼らの親戚か知人の娘で、そのつながりによってこの「見知らぬ娘」を「知っている娘」に変換できればと淡い期待を寄せるかのように、「誰の子か」とたずねた。

ハイルハンでは見知らぬ者が来ると父の名をたずねる。答えは、父親がいれば父の名、父がいなければ母の名によって「誰その息子／娘」という。他の行政区や他の郡の出身者は地名をつけて、「どこそこの、誰その息子／娘」と名乗る。父の名を言っても相手がわからない時には、兄や男性親族の名をあげて「誰そのドゥー」と言ってみる。「ドゥー」は広く年少親族を意味する。

ハイルハンでは本名があまり使われず、あだ名で呼ばれることが多かった。大人が幼児に親しみをこめて呼びかけるいくつかの呼称のうちの一つが定着し、大人になっても呼ばれ続ける。たとえば「赤ちゃん」や「はげ」である。ただし本名、あだ名ともにバリエーションが多いとはいえず、同名で呼ばれる人が複数いた。このような事情があつて、「どこそこの誰の子、はげ」といった

具合に「誰の子か」がいつもついて回る。

#### 四 姓のない社会

モンゴル人の名前には姓がなく、名前だけである。実際には、同名の人が多いことや、外国人と関わる時に姓がないと不便であるため、父の名を姓として代用している。具体的には、「誰の(子)」という形容詞として父の名を用いる。身分証明書にもこれを適用し、姓の欄に父の名の所有格を記載する。これは「誰の子か」という問いに答えているのと同じである。なお「父の名」は結婚や離婚により変わることはない。

このような名前のしくみは、モンゴル国の中だけでは全員がそうなので不自由はない。しかし中国やロシア連邦の国民であるモンゴル系の人びとは、名前に関する支配的な基準に適應する必要がある。中国においては、漢人と接触の歴史の長い南西部のグループはモンゴル名ではなく漢人風の名前を使っている。姓と名の二つからなる日本と共通した命名法である。一方、大部分の内モンゴ

ル人は、たとえば「ガルサンドラム」といったモンゴル名に音の似た漢字を当てている。さらには、その一部を姓、残りを名として役所に届け出ている。モンゴル人どうしはモンゴル名で呼び合うが、多くの漢人は学校や職場で、モンゴル人に姓がないとは知らずに名前の一部を姓として用いる。

ロシアでは、名前は名、姓、父称の三つからなり、行政登録にもこの三つが必要である。モンゴル系の人びとにとって名と父称(父の名)は親しんできたものであるが、もうひとつ姓をつけなければならぬ。ブリヤート共和国では一九五〇年代頃まで姓と父称に関する基準がなく、同じ両親のもとで育つ子どもが、父や祖父の名を個々ばらばらに姓や父称として登録していた。このため現在でもキョウダイの間で姓が異なる場合がある。

では、日本で暮らすモンゴル人たちはどのように呼ばれているだろうか。内モンゴル人は、漢人からよばれる「姓」を日本語読みした「名字」で呼ばれることが多い。つまり、モンゴル名の当て字の漢字を日本語読みした「名字」で呼ばれるのである。たとえばスチン氏はス

ーさんとなる。彼女の日本滞在を保証する書類には、姓の欄に斯(ス)、名に琴(チン)と記されているので、そう呼ばれるのが仕方のないところもある。だがスチンは「智慧」を意味するひとつの語であり、スはモンゴル語として意味をなさない。内モンゴルの人びとは、中国で生涯受けてきた漢文化への同化圧に疲れて、異文化の人びとがモンゴル文化を理解しないものと諦めているようにも見える。

モンゴル国から日本に来た人びとは、自分の名前をラテン文字(英語のアルファベット)に転写して記す。日本人のほとんどがキリル文字を読めないことを知っているからだ。彼らは、書類上の正式な名前と関係なく、慣れ親しんだあだ名や、日本人が発音できる折衷案を提示することで、日本における自分の名乗り方を自分で決めている。外モンゴル人は異文化と出会う時に根元的な自信にあふれた強さをみせる。内外モンゴル人の態度の違いには、国家のなかでマイノリティー／マジョリティーとして生まれ育った経験が影響していると考えられる。

## 五 おわりに ― 見えない差異

ハイルハンの年長者のなかには、私を見て外国人だと信じない人が多かった。目が切れ長で、瞳が黒く、髪も黒く、なんら自分たちの子どもたちと変わるところがなかったからだ。このために「モンゴルの」「未婚の女らしく」振る舞うように強いられて苦勞もした。

それと同じように、日本に来ているモンゴル人留学生も日本人と間違われて、忙しい地下鉄駅員などから「外国人などと言って人をばかにするんじゃない」と怒りを買ったりするという。モンゴル人は容姿や服装、日本語の話し方などが、最近増えている中国人と比べても日本人に似ていると思われるようだ。

とはいえ、日本ではモンゴル人とは誰かについての理解は乏しい。もう一度まとめると、モンゴル人のなかには、中国国籍の「内モンゴル人」とモンゴル国籍の「外モンゴル人」の両方がいる。ある外モンゴル人は、日本の社会科学系の大学院入試の面接で、「あなたは名前をな

ぜ漢字で書かないのか」と問われ、その大学院スタッフに失望したという。私たちが身近なアジア人どうしは、自分を中国人と間違われると憤慨しても、自分に似た相貌の外国人をみるとなぜか中国的なイメージを押しつける癖があるようだ。

(かざと まり／京都大学地域研究統合情報センター研究員)

注(1) モンゴル研究の道に入った経緯の詳細については、

風戸真理(二〇〇六)「モンゴル研究への苦難の道の

り」京大探検者の会編『京大探検部一九五六年から二

〇〇六年まで』(東京：新樹社、pp.451-461)に詳し

い。

## 世界のくらしと文化

— モンゴル国②

### モンゴル遊牧民の自然観

— 自然に対する畏怖と

ナーダム



モンゴル遊牧民のキャンプ。2つのゲルが並んでいる。この秋、ここでは2世帯が協力して生活している。  
(筆者撮影)

風戸 真理

はじめに

モンゴルの宗教はチベット仏教であるといつてよい。ゲル(移動式天幕)には仏壇があり、経典、仏画、仏像がおさめられている。だが、仏教とやらんで、あるいは混淆して人びとの心に深く根付いているのが自然に対する信仰心である。モンゴルの遊牧民は自然をどのように捉え、そしてどのようにつきあっているのだろうか。

私は、モンゴル国のアルハンガイ県チョロト郡バヤン・ハイルハン行政区(十月号、地図参照。以下、ハイルハンとよぶ)で一九九七年春からの二年間、はじめての長期調査をおこなった。ハイルハンは首都ウランバートルから七六〇キロ離れた約四〇万ヘクタールの行政領域であり、約七〇〇人、一八〇世帯が牧畜を生業として暮らしていた。

モンゴルでは一年は四つの季節として区分され、それは「春」、「夏」、「秋」、「冬」とよばれている。牧民は私に、「日本には四つの季節があるか」としばしば尋ねた。おかしなことを聞くものだと思っていた。なぜなら私自身は、モンゴルに日本と同じように春夏秋冬があること

を当然のこととして受け入れていたからだ。しかしながら、彼らは自身の暮らす自然環境と自身の環境認識を相対化しているのだと気づいた時、私は衝撃を受けた。

ハイルハンの自然は本当に美しかった。幅三〜五メートル、深さ数十センチの小川、ハノイ川の氾濫原は五〜六月にはお花畑となる。なによりも、ハイルハンではどこでも風景のなかに木々があつた。その後、モンゴル国内の木がほとんどみられない地域で長期調査をしてみて、毎日の生活のなかで森や林が見えることが私の心をどれだけ落ち着かせるかをはじめ知った。乾燥した地域にはほとんど木がなく、木陰もない。

#### 一 ハイルハン山への信仰

バヤン・ハイルハン山(以下、ハイルハン山とよぶ)の周囲に広がるのがハイルハン行政区(以下、ハイルハンとよぶ)である。ハイルハン山は小高い独立峰であり、その南裾をハノイ川が西から東に向かって流れている。南西の裾野には行政区の中心地がある。板壁で囲われた集落になっていて、学校と集会所がある。

ハイルハン山の東の中腹には七本の小さなシベリアカ

ラマツが生えている。ほかに樹木はない。この七本の木は「七つの神さま」、すなわち北斗七星と同じ名前でもよばれていた。

ハイルハン山から西へ伸びる稜線には、その鞍部から西側の丘の頂に向かって、十三個の石塚が等間隔で並んでいる。鞍部の石塚は高く大きく積み上げられており、オポーと呼ばれている。聖山のオポーは、山の霊を鎮めるための拝所となっている。オポーの立つ峠は、行政区の中心地から郡の中心地へ向かう道の途中にあたり、自動車、乗用馬、徒歩で多くの人びとが行き交う。人びとはオポーを通り過ぎる時、その周囲を三回時計回りに廻りながら、小石を拾って積み重ねたり、準備してきた布幣や酒、携行している乳製品や紙幣、また火を象徴するマッチなどを供える。オポーはモンゴル中に見られ、多くの人びとから信仰されているオポーには、塚に長い棒が差し込まれ、その棒には新旧様々のカラフルな布が絡みついて風になびき、空き瓶や馬の頭骨、自動車の部品などがうずたかく積まれている。駿馬が死ぬと、その頭は地元のオポーに捧げられるという。

ハイルハン山の呼称である「バヤン・ハイルハン」というモンゴル語の意味は「豊かで、畏れおおい」であ

る。実は「ハイルハン」とは、畏れ敬う信仰の対象を直接に名指すことを禁忌するために与えられた言葉である。この聖なる山には本当の名前があるが、その名を知る人は多くはないという。

この山は古代から特別な意味を与えられてきたようである。それは、山の南面と西面に散らばるたくさんのヒルギス・フルの存在から推察される。ヒルギス・フルはモンゴル語で「キルギス人の墓」という意味である。林俊雄氏によるとこれらは紀元前八〜四世紀につくられた。形状は、小さきさまの積石塚が正方形や円形の石囲により囲まれ、さらにその外周を小さなストーンサークルや石堆が幾重にも取り囲んでいる。このような遺跡は北アジア各地にみられる。

ハイルハン山麓に散らばるたくさんのヒルギス・フルはとても美しい。そして歴史的、考古学的にも魅力的である。私がハイルハン山の石塚群に見入っていたところ、「むやみに見えてはいけない。ハイルハンは恐ろしいのだ」と三三歳の男性ババさん（人名は仮名とする）に止められた。加えて、ハイルハン山をめぐる多くの禁忌を教えられた。それは、ハイルハン山には女性は登ってはいけない、ハイルハン山に顔を向けて用足ししてはい

たババさんのゲルに入り、植物をちゃぶ台に並べた。ババさんと妻はひどくいやがり、早くゲルから出て、ゲルとその周囲に広がる家畜の寝床から遠く離れた場所に捨ててくるように言った。

ババさんは説明してくれた。「植物には聖なる植物と穢れた植物のふたつある。後者をむやみに摘んではいけない」。聖なる植物とは、野生植物のうちで一般牧民が名前と利用方法を認知している少数種の植物である。利用方法には、食用、薬用、茶やガムといった嗜好用、家畜の飼料用などがある。他方、ハイルハンに生育する大半の植物が穢れているという。それらは、牧民が有毒であることを知っている植物、または利用しない植物である。さらには、宗教的職能者すなわちシャーマンだけが知る隠された知識があるという。今になって思えば、私が採集した植物のなかに、シャーマンだけが名前と利用方法を知っている強いパワーをもつ植物が入っていることを、ババさんらは心配したのかもしれない。

### 三 水の精の怒り

翌日、私は釣りをした。ハイルハンの人々は常々、

けないなどである。

バヤン・ハイルハン山は怒りに満ちた恐ろしい存在であるようだ。そして私の調査もハイルハン山の罰にあたって難航した。

### 二 植物に関する禁忌

一九九七年七月、ハイルハン山の植生や植物の利用方法を知るために、植物をよく知っている年長者ダルガさんと一緒に植物採集に出かけた。私たちはそれぞれウマに乗って谷を登り、中流域で降りた。ダルガさんは薬用植物を一握りほど摘んで懐に入れた。私はいろいろな植物を摘んでは彼に見せて名前を尋ねた。ダルガさんは、自分が名前を知らない植物を私が見せると「けがらわしい。捨てろ、捨てろ」と言っていた。花の咲き乱れるたくさんの種類の植物の繁る場所で、ダルガさんはほんの数種類の植物の名前だけを「知って」おり、それは疾病治療などの特定の目的に「よい」と語った。

私は何種類かの植物とキノコをカバンに入れて山を下りた。ダルガさんが知らなくても他の人が名前を教えにくれるかもしれないと思つてのことである。寄宿してい

「ハノイ川には一メートル以上の大きな魚がたくさんいる。それをピロシキのように料理すると絶品だ」と自慢していた。私はその大魚を自分の目で見て、釣つて、食べてみたくて、水が温むのを待っていた。

ついにその時がやってきた。そこらじゅうで跳ねているイナゴを捕まえ、これを釣針につけた糸を水の中に垂らす。三〇〜四〇センチ前後の魚が食いついた。サケ・マス科のカルスやアムールイトウなどである。魚がエサに食いついた瞬間、もう片方の手ですばやく糸を引き、手を中心に糸で弧を描くように魚を川岸に振り上げる。ハイルハン若者が作つた釣針には返しがなかった。

たくさん釣れた魚をもってババさんらのキャンプに戻った。これを見た人々はいへん恐れ、ババさんの妻は自分の家の竈で調理するのをいやがった。調理を許してくれた隣人宅でも、焼き上がったムニエルをすすめたところ大人はほとんど食べなかつた。内臓や身をイヌにやつたが、いつも腹をへらしているイヌたちも魚はほとんど食べなかつた。これまでハノイ川の魚のおいしさを語っていた人びとは、「話したり、聞いたたりすると、実際に食べるのとは違う」と言った。

その翌日、雨が降り始めた。やまない雨は二日間降り

続いた。ハノイ川は氾濫し、洪水になった。ハノイ川沿いに集中してキャンプしていた多くの牧民のゲルが、浸水し、家財道具が濡れた。雨のなかゲルをたんで牛車に積み、安全な場所に引越していく人びとの姿がみられた。ババらのキャンプはわずかに小高い場所を選んでいたので、氾濫原の中で無事であった。

この長雨と洪水のあいだ、折りも悪しくも私は下痢と高熱にたたられた。人々は、植物を採った罰で私が病気になるのだとか、魚を釣って「ロス」(水の精)の怒りに触れたために洪水が起きたのだと語った。

#### 四 ハイルハン山を鎮める祭

ハイルハン山は「土地のもち主」であるという。ハイルハン地域のすべてのもの、すなわちハノイ川とそのロス、牧地、聖なる植物、穢れた植物などのすべてがハイルハン山の精霊の管理のもとにあるのである。三日間やまない雨や洪水は、ロスの親玉であるハイルハン山のたたりであると考えられているのである。

このような怒りに満ちたハイルハン山を慰め鎮めるため、毎年ハイルハン山のオボーを祀る。オボーの天高く

伸びる形は、モンゴルの人びとが究極的に信仰する「天」と人間の生活圏である地を結ぶものである。オボーを通してハイルハン山を祀ることで、恵の雨を乞い、その一年間の気象の安定を願う。

六三歳のドージさんは「ハイルハン山の奉り人」とよばれている。ドージさんの両親がハイルハン山の奉り人だったので、彼とそのキョウグイも山を奉まつているという。

祭の手順は、まずドージさんが自分のヒツジを一頭屠殺する。その臀部から脂肪尾にかけての肉と脂肪を骨ごと、幅約二五センチ、長さ四〇センチの長方形に切り取って茹でる。ほかに馬乳酒、牛乳の蒸留酒、その他の乳製品を準備する。これらを携えて早朝オボーに向かう。オボーに着くとドージさんは食べ物を供え、酒を振り撒く。この礼拝に参加したい人は男女を問わずオボーに集まる。そこでは全員が少しずつ食べ物の分配に預かり、ともに食べる。その後、ドージさんはウマに乗ってひとりでハイルハン山中腹のヒルギス・フルルに向かい、そこに供物の一部を捧げる。

午後、オボーに捧げるための運動競技会が催される。この競技会は、競馬、相撲、そして地方によっては弓道

を加え、「勇者の三種の武道祭(エリン・ゴロブン・ナーダム)」、通称「ナーダム」とよばれる。ドージさんは賞品を用意して、この日のために練習を積んできた参加有志の成績優秀者を祝福する。ハイルハン山の祭は、山の奉り人が祭司となり、山の拝所であるオボーに犠牲と武芸を捧げ、土地の精霊たちの親玉である聖山の精霊を鎮める祭なのである。

#### 五 モンゴルのナーダム

自然に対する宗教的な儀礼であったナーダムは、社会主義期にその性格を変えた。主として、七月十一日の革命記念日を祝うものになったのである。だが「土地のもち主」に奉納するためのそれは「オボーのナーダム」とよばれて細々と続けられてきた。なぜなら、「土地のもち主」は自然の荒ぶる力と豊かな恵との両方を支配するきわめて強い力を持ち、社会主義の開発でさえもこれを制圧できなかったからである。

モンゴル高原の年間降水量は一五〇〜四〇〇ミリ程度、つまり日本で台風の一晩で降る雨の量ほどしかない。しかも年による変動が激しく、かつ予想がつかない。

い。夏に雨が少なければ干ばつが、雨が降りすぎれば洪水が起きる。冬に雪が少なければ春の芽生えが悪くなり、豪雪の年は家畜が雪の下の草を掘りだして食べるこ

とができずに弱って死ぬ。今日のモンゴルでは、競馬と相撲は伝統的な武芸であると同時に、巨大なビジネスとなっている。政治との関係も深い。モンゴルの競馬と相撲と弓道は、日本のそれらと比べると一見ゆつたりとして見えるかもしれない。

しかしモンゴルの「三種の武道」は、人間にはどうすることもできない自然の脅威のもとで生きる人びとの、自然に対する畏敬の念に裏打ちされた厳肅な行為であり、同時に、豊かで短い夏の楽しみなのである。

(かざと まり/京都大学地域研究統合情報センター・研究員)

## 世界のくらしと文化

— モンゴル国 ③

### 異文化としての日本

— モンゴル遊牧民の  
視点から



二〇〇三年一月、モンゴル国ザブハン県テルメン郡にて。現代モンゴルの遊牧民家族は、太陽光発電パネルと衛星アンテナをもって移動する(筆者撮影)

風戸 真理

はじめに

私は一九九三年にはじめてモンゴル国をおとずれて以来、モンゴルの牧畜の技術と社会の変化についてフィールドワークに基礎をおいた調査研究をおこなってきた。遊牧民のゲル(移動式天幕)をたずねては、老若男女それぞれにいろいろな質問をなげかけて話を聞く。話が盛り上がる、「うちに泊まって」と誘ってくれる。招きには喜んで応じ、泊まり込んで何日間も対話と観察を続けるなかで理解したことをデータとして蓄積する。これが人類学的な参与観察といわれる調査方法である。

とはいえ、聞き取り調査をするのは私だけではない。彼らも、モンゴル語を話すめずらしい外国人が自分の家に滞在したらしばらくのあいだ目新しい話を楽しめるだろうとの心づもりがある。モンゴル人はいつも「ソニン」を求めている。ソニンとはモンゴル語で、新聞、ニュース、そして目新しい話を意味する。

本稿では、モンゴルの遊牧民からみた現代日本の姿について、日本についての彼らからのたくさん質問を通して描きたい。モンゴルでは日本に関する、私にとっては驚くような情報が、もつともらしく流布しており、彼

らはその真偽を確かめたり、詳細を確認したりしようとした。彼らは日本そして私個人について口々に聞きまくるのだが、多勢に無勢で私は一人ですべての質問に答えなければならず、苦勞した。

— 「笑ってはいけない」

モンゴルの人びとは話すことが好きである。会話そのものとともに、ときに長い沈黙を含む会話の時間を味わっているように見える。そして冗談が好きだ。吹き出してしまうような冗談もあったが、私には可笑しさがわからないものも多かった。一方で、人びとが真顔で語ったことがらや問いのなかには、いま思い出しても笑いがこみ上げてくるものがある。

困難の多いフィールドワークのなかで私は、日常会話のなかで私と彼らのあいだに現れる微細な差異と共通点とをみつけることに喜びをみいだしていた。フィールドワークは常に「ソニン」に満ちあふれているわけではない。調査期間が数カ月の長期におよぶと、日常は同じことの繰り返しで構成されていることを知らされ、時は弛緩したように感じられる。

そのような委屈さへの対処として、モンゴルの人々は

冗談を言ったり、外部からのソニンを求めている。私は、つまらない冗談につき合いながら、常にメタレベルの可笑しさを探し出し、笑うことで気持ちをゆるめていた。そんな私にダワースレン(三三歳、男性)は「笑ってはいけない」と言った。「会話のなかでおかしい時、笑うべき時に笑うのはよい」が、「会話のときにいつも声を出して笑っているのはどういうことか。おれを侮蔑しているのか」と真顔で問いつめられた。私にとっては、「おかしい時、笑うべき時」が私と彼らのあいだで一致しないことが笑いの種であったのだが、まさにそのことが彼の神経を逆なでしていた。「笑ってはいけない」と強くたしなめられた。

ダワースレンの言い分はモンゴル文化的にはしごくまっとうなものだと思う。モンゴルでは概して感情はひかえめに表現される。贈り物は表情を変えずに無言で受け取り、傷病の痛みや苦しみは、できる限り人に言わずに一人で耐えることが美德とされる。だが、他者に対して寛容な人も多かった。おかげで、日常会話のなかで思わず笑い転げてしまう幸せな時間があつた。そのようなエピソードを紹介する。

## 二 「日本には一生、

地面を踏んだことがない人がいる？」

繰り返したずねられたもつとも印象深い質問が、日本の都市生活に関する逸話の真偽である。語り手により細部にバリエーションはあるが大筋はおおむね次のとおりである。

日本にはそれはそれは高い建物があり、各階には住居、職場、保育園、学校、商店など生活に必要な施設がすべて揃っている。人びとはその一室で生活し、同じ建物内の職場に毎日通い、子どもは同じ建物の中にある保育園に預ける。子どもが就学年齢に達すると、やはりこの建物の中にある学校に入学する。そこで一〇年間勉強し（モンゴルにおける理想的な教育年限）、卒業すると高層ビル内にある組織のひとつに就職する。毎日、ひとつの建物のなかで上下移動しながら通勤し、生活するといふのである。ゆえに、日本には生まれた時から大人になるまで高層ビルの中で過ごし、土の地面を自分の足で踏んだことがない人がいるというのは本当か、というものである。

モンゴル遊牧民によって語られる日本の都市生活は、人間が自然界および外部世界から隔絶され、超高層ビル



1998年2月、アルハンガイ県チョロート郡バヤン・ハイルハン行政区にて。10代の未婚青年たちが真新しいデル（民族衣装）を着て親戚宅をまわり、モンゴル暦の新年を祝う（筆者撮影）

という限定された空間に閉じこめられて一生を終えるというSF的なものである。だが個人の位置づけに注目すると、全体が精緻に設計された機械の歯車のような役割を与えられている。このことは、いわゆる「社会主義」の悪弊として日本で語られてきたことである。つまり、「西側世界」は「東側世界」に対して、社会が個人に極端に優先されることによる悲劇という他者表象をおしつけてきたのであるが、「東側」も「西側」に対して同じことをしていたのである。

モンゴル遊牧民は、社会主義期には国家のために牧畜労働者として働き、現在は市場経済のもとで自分と家族の生活を支えるために自営業の牧畜業者となっている。彼らは社会主義と資本主義の両方を経験しつつも、一貫して家畜に依存した生活をいとなみ、自然の恵みを受けて生きてきた。そんな彼らが語る、大地との関係に焦点を当てたアネクドット（小話）は、イデオロギーを超えた痛烈な近代批判であるように思われる。

### 三 「日本沈没に備えた調査をしているのか」

もつとも頻繁に答えなければならなかったのは次の質問である。すなわち、日本は海のなかの小さな島であ

り、近い将来に沈むといわれている。その時の脱出先として、モンゴルが日本人の生きていける環境であるかどうかを、私が人体実験を兼ねて調査しているのではないのか、というものである。

最初に聞いたとき、その頓狂な発想に笑いが止まらなかった。しかし笑っている場合ではなかった。質問者はいつも真剣であり、私にスパイ嫌疑をかけている。社会主義期のモンゴルは日本を仮想敵国としていた。日本人スパイの存在は彼らにとってリアリティーがある。また、「スパイ局」は体制転換以後も機能していた。私は、日本が彼らの考えるほどちっぽけな浮島ではなく、沈没の日は遠いこと、そして私が国家の手先としてではなく、学問の自由という原則のもとで調査研究をしていることを懸命に説明した。議論好きなモンゴル人を納得させるには忍耐が必要だった。そして、新しい質問者に出会う度に一から説明しなければならなかった。

モンゴルで人口に膾炙している「日本沈没」説は小松左京のSF小説、『日本沈没』（一九七三年）をもとにしている。小説の内容は、日本が海中に沈み、日本人が世界中に離散するというものである。このフィクションは、ペレストロイカ以降にモンゴルを訪問する日本人が増え

た時、現実と入り混じったものとして世論を湧かせた。大阪外国語大学モンゴル語学科が、体制転換直前のモンゴルにおいて隊を組んで長期調査をおこなったとき、モンゴルのマスコミはこれを、日本人がゲルに住んでヤギなどの家畜を飼って暮らせるかを試す移住実験が始まった、と報じたのである。

このこと背景には次のような事情がある。日本で「ノモンハン事件」とよばれるべきことは、モンゴルでは「ハルハ川会戦」とよばれている。ハルハ川会戦は、モンゴルが経験した唯一の近代戦であると同時に、第二次世界大戦の直接経験としての意味がある。敵は日本軍である。このような歴史的背景があるため、モンゴルでは日本がモンゴルの土地を侵略しようと虎視眈々とねらっているという言説が受け入れられやすい。そして私も、その一翼を担う者とみなされたのである。

#### 四 笑う幸せ

日常会話のなかにも思わず笑い転げてしまふ幸せな時間があった。それらを紹介する。

「新年にはヒツジを一頭屠殺しておまえに送ってあげ

バイルマー「(夫に対して) 最近は何もないんじゃないやない?」

バイルマー「あなたの名前なんだっけ」

私「カ・ザ・ト」

バイルマー「あ、そっか。ナターリヤだったっけない?」  
「と思っていたの」

牧民たちは私に、私が彼らに投げかけたのと同じくらいたくさん質問を浴びせた。素朴な発想がかえって斬新でおかしみに満ちたものに感じられることが多々あった。一方で、初めて会った人から海外旅行保険の心配をされ、その現代的で現実的な関心に驚きつつも、親である人の気持ちはどこでも同じようなものだと感じて思わず頬がゆるんだりもした。何気ないおしゃべりのなかで生まれるおかしみは、私の身体を笑いへと導く。これが私がモンゴルと関わる原動力のひとつとなっている。

(かざと まり／京都大学地域研究統合情報センター、研究員)

たいが、誰にことづけて届けてもらえばよいものか。日本大使館に持っていったらどうかね」

(ナツガーさん、六五歳、男性)

「こうやって歩いていて、保険をかけていますか」

(アグワンさん、五五歳、男性)

「日本には乾いた土地が少ないんでしょう? 海のなかにあるから」(バトトゥムル、バイルマー夫妻、五〇代半ば)

日本にはどんな家畜や動物がいるのかという話の中でバトトゥムル、バイルマー夫妻「海のウシ」(イルクヤクジラを指す) っていうのがいるんでしょう?」

私「はい。います」

バイルマー「……毛がないんでしょうねえ」

上述のバトトゥムルさんがステゴザウルスなど、恐竜のシールが貼られた箱を私に見せて

バトトゥムル「日本にこれ、いる?」

私「これは恐竜! 大昔にいたけれど今ではいません」